

『理趣経』における密教の生死観

大塚伸夫
(大正大学)

はじめに

『理趣経』は、不空(705~774)による訳出で、正式な経題は『大楽金剛不空真実三摩耶経』であるが、「般若波羅蜜多理趣品」という品名があることから、これを略して『般若理趣経』とか、単に『理趣経』などと称している。本経の類本は短めの略本と、儀軌を含む長めの広本とに大きく二分類することができる。それぞれに属する類本には、サンスクリット語・チベット語訳・漢訳を含めて、全体で11本の類本がある。そのうち、本稿で取り上げる『理趣経』は、以下に掲載する略本中の(4)『大楽金剛不空真実三摩耶経』一卷にあたる。

本経は、玄奘によって訳出された(1)『大般若波羅蜜多経』第五七八卷、第十会「般若波羅蜜多理趣分」を原形に、般若の空思想を継承しながらも、中期密教経典の『金剛頂経』と関連を有しながら、密教的に展開した経典といわれている。近年、(4)『理趣経』のほぼ全体に対応する新たな梵文写本が報告されたが、それが(7)内にあげたものである。なお、わが国の真言宗の伝統によると、密接な関連が指摘されている『金剛頂経』系グループに属する経典とみなされ、常用の読誦経典という位置づけがなされている。

略 本

- (1) 『大般若波羅蜜多經』第五七八卷，第十会「般若波羅蜜多理趣分」，玄奘訳（大正 No. 220）
- (2) 『実相般若波羅蜜經』一卷，菩提流志訳（大正 No. 240）
- (3) 『金剛頂瑜伽理趣般若經』一卷，金剛智訳（大正 No. 241）
- (4) 『大乗金剛不空眞実三摩耶經』一卷「般若波羅蜜多理趣品」，不空訳（大正 No. 243）⁽¹⁾
- (5) 『偏照般若波羅蜜經』一卷，施護訳（大正 No. 242）
- (6) チベット訳『聖なる般若波羅蜜多の理趣百五十頌』（東北目録 No. 489）⁽²⁾
- (7) 梵文『百五十頌般若波羅蜜多』（泉・梅尾共編『梵藏漢対照般若理趣經』1917年）〔※新出写本：苦米地等流「『理趣經（百五十頌般若經）』の進出サンスクリット写本」『高野山大学密教文化研究所紀要』第22号，2009年，pp.(1)-(17)，(Adhyardhaṣaṭīkā prajñāpāramiṭā テキスト未収載)〕

広 本

- (8) 『最上根本大乗金剛不空三昧大教王經』七卷，法賢訳（大正 No. 244）
- (9) チベット訳『吉祥最勝本初と名づける大乘儀軌王』（東北目録 No. 487）⁽³⁾
- (10) チベット訳『吉祥最勝本初眞言儀軌品』（東北目録 No. 488）
- (11) チベット訳『吉祥金剛場莊嚴と名づける大タントラ』（東北目録 No. 490）⁽⁴⁾

『理趣經』全体の構成は、伝統的に「十七段」と呼ばれる17章によって構成されており、各章ごとに「煩惱即菩提」の理論と実践方法が、それぞれ

れの立場のもとにメッセージされている。本稿では、全部で十七段あるうち、とくに初段・十二段・十三段・十六段・十七段を用いて、われわれ凡夫が日常生活をどのように生きていくべきなのか、『理趣経』が主張する「生きる意味」について、密教の立場から論じてみたい。

1 初段所説の十七清浄句

それでは、初段から「十七清浄句」と呼ばれる部分を取り上げ、初段にメッセージされる煩惱即菩提の意義を見ていきたい。まず、十七清浄句には、①「妙適」から⑰「味」にいたるまで十七種の煩惱が列挙され、これらが清浄で菩薩の位であると述べられている。文字どおりにこの文意を解釈すれば、十七種の煩惱すべてが本来清らかで、これらが密教菩薩のあるべき境地と述べているように理解できる。漢訳を以下に引用してみたい。

[薄伽梵大毘盧遮那如來は] 是の如き等の大菩薩衆の與に、恭敬し圍繞せられて、而も為に法を説きたまう。初中後善にして、文義も巧妙なり。純一円満にして、清浄潔白なり。一切法の清浄句門を説きたまう。謂はゆる、

①妙適 (surata) 清浄の句、是れ菩薩の位なり。

(金剛薩埵瑜伽三摩地・普賢菩薩位)⁽⁵⁾

②慾箭 (rāgavāṇa) 清浄の句、是れ菩薩の位なり。

(慾金剛瑜伽三摩地・慾金剛菩薩位)

③触 (sparśa) 清浄の句、是れ菩薩の位なり。

(金剛髻離吉羅瑜伽三摩地・金剛髻離吉羅菩薩位)

④愛縛 (snehabandhana) 清浄の句、是れ菩薩の位なり。

(愛縛金剛瑜伽三摩地・愛金剛菩薩位)

⑤一切自在主 (sarvaiśvaryādhīpatya) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(金剛傲瑜伽三摩地・金剛傲菩薩位)

⑥見 (dṛṣṭi) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(意生金剛瑜伽三摩地・意生金剛菩薩位)

⑦適悦 (rati) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(適悦金剛瑜伽三摩地・適悦金剛菩薩位)

⑧愛 (tṛṣṇā) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(貪金剛瑜伽三摩地・貪金剛菩薩位)

⑨慢 (garva) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(金剛慢瑜伽三摩地・金剛慢菩薩位)

⑩莊嚴 (bhūṣaṇa) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(春金剛瑜伽三摩地・春金剛菩薩位)

⑪意滋沢 (manohlādana) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(雲金剛瑜伽三摩地・雲金剛菩薩位)

⑫光明 (āloka) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(秋金剛瑜伽三摩地・秋金剛菩薩位)

⑬身楽 (kāyasukha) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(冬金剛瑜伽三摩地・冬金剛菩薩位)

⑭色 (rūpa) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(色金剛瑜伽三摩地・色金剛菩薩位)

⑮声 (śabda) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(声金剛瑜伽三摩地・声金剛菩薩位)

⑯香 (gandha) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

(香金剛瑜伽三摩地・香金剛菩薩位)

⑰味 (rasa) 清浄の句, 是れ菩薩の位なり。

何を以ての故に、一切法は自性清浄なるが故に、般若波羅蜜多も清浄なり。⁽⁶⁾

そもそも、われわれ凡夫は煩惱を有し、それを満たすことに喜びを感じる生き物である。釈尊以来、仏教はそういった煩惱に引きずられた生き方を否定してきたが、密教経典である『理趣経』では、動物の本能ともいえる煩惱を十七種に集約して、それが菩薩本来の清浄な境地であったと、煩惱の本質を指摘しているのである。つまり、煩惱こそは、菩薩の菩提心の徳性であったというわけである。それゆえ、現実には繰り広げられる醜い煩惱をそのまま表層的に肯定する単なる煩惱肯定論ではなく、煩惱の奥深い本質を見抜いた煩惱本質論とでも捉えるべきであろう。

そのことは、十七種の煩惱の動きが、心内から外境へと次第に向けられ発動していく過程から具体的に見て取ることができる。まず心内に、①妙適という根源的な煩惱が存在し、これから②慾箭より⑤一切自在主という根本的な四煩惱が生ずる。そして、これら四煩惱が欲望発動の直接動因になって、さらに欲望対象に向う⑥見から⑨慢の新たな四煩惱を心内に惹起させる。やがて、⑩莊嚴から⑬身樂のように、欲望対象に向っての準備行動が始まる。最後は、⑭色から⑰味のように欲望対象の前に現れて欲望を成就するといった、煩惱の発動より行動に移すまでの四段階の過程にしたがって、十七種の煩惱が並べられている。無造作に十七種の煩惱が列挙されているわけではないのである。ここで注目したいのは、この凡夫の煩惱心発動から欲望成就までの全過程そのまま、菩薩の菩提心にもとづく衆生救済活動と同一でもあるという点なのである。つまり、何か求めて止まない心の動きは凡夫も菩薩も同じで、煩惱によるか、無分別の菩提心によるかの相違でしかないとみることができる。この欲望対象を求めて行動す

る煩惱心の動きと、救済対象を求めて菩薩行する菩提心の動きという両者の関係は、以下に掲載した表のように対応する。

表1 <凡夫の煩惱心>と<菩薩の菩提心>に関する対応表

	欲望発動の動因→		内心の欲望発動→	準備行動→	現場に向く	
凡夫の煩惱心の発動過程	①妙適 (欲望をみたく満足感)	②慾箭 (対象が欲しい)	⑥見 (見たい)	⑩莊嚴 (身を飾る)	⑭色 (姿を現す)	凡夫が欲望対象に向かって貪欲心を発動し、欲望成就の実行に移す順序
		③触 (触れたい)	⑦適悦 (喜ぶたい)	⑪意滋澤 (満足する)	⑮声 (声を出す)	
		④愛縛 (離したくない)	⑧愛 (愛したい)	⑫光明 (身を輝かす)	⑯香 (安楽を与える)	
		⑤一切自在主 (慢心したい)	⑨慢 (活動したい)	⑬身楽 (苦痛を忘れる)	⑰味 (喜びを味わう)	
	救済発動の動因→		内心の救済心発動→	準備行動→	現場へ向く	
菩薩の菩薩心の発動過程	①妙適清淨 (大楽・菩薩として生きる充足感)	②慾箭清淨 (大欲・救済心)	⑥見清淨 (救済の目で見よう)	⑩莊嚴清淨 (菩薩として身を飾る)	⑭色清淨 (菩薩の姿をとって現れる)	密教菩薩の代表である金剛薩埵が、救済対象に向かって救済心を発動し、実際の菩薩行を実行する順序
		③触清淨 (大触・関与心)	⑦適悦清淨 (救済の喜びを得たい)	⑪意滋澤清淨 (救済に満足する)	⑮声清淨 (説法の声を出す)	
		④愛縛清淨 (大愛・慈愛心)	⑧愛清淨 (助かるまで離さないと慈愛する)	⑫光明清淨 (菩薩として輝く)	⑯香清淨 (安心を与える)	
		⑤一切自在主清淨 (大慢・自尊心)	⑨慢清淨 (菩薩として活動したい)	⑬身楽清淨 (苦痛を忘れる)	⑰味 (覚りの喜びをともに味わう)	

この表を見れば、凡夫の煩惱心が、みごとに菩薩の菩提心の有り様に対応しているのが理解されよう。このようなわけで、十七煩惱が十七種の菩薩の境地であるといわれたのであろう。しかしながら、この初段における十七清淨句の主張は、発菩提心した①の密教菩薩・金剛薩埵の境地である「大楽」に安住できた者のみがいえることであらう。そのことを自覚しない凡夫のままでは、現実と何ら変わらない欲望対象に向かって行動を起こす

煩惱まみれの「ヒトという動物」にすぎない。そのため、『理趣経』初段では、われわれに十七種の菩薩の境地にたつて、救済対象に向つて「菩薩」として生きよと、本来あるべき自心への回帰を要請しているのである。これが「十七清浄句」と呼ばれる内容と考える。『理趣経』はよく、われわれの煩惱を肯定する経典といわれてきたが、それは単なる肯定ではない。大日如来の智眼で煩惱の本質を見極めたからこそ、それが清浄で菩薩の菩提心の徳性であるといえたと考える。

これら十七種の煩惱と菩提心の対応関係を構造的に捉えてみると、ちょうど図1のような構造をとるように思える。たとえば、十七種の煩惱は、先の表のように①妙適を根本動因にして、②欲(慾箭)・③触・④愛(愛縛)・⑤慢(一切自在主)が引き起こされ、残る十二煩惱が②③④⑤の系列ごとに惹起するので、十七種の煩惱は根本となる①妙適を中心に、②から⑤の四つのグループにまとまることになる。そして、この五煩惱は、結局、

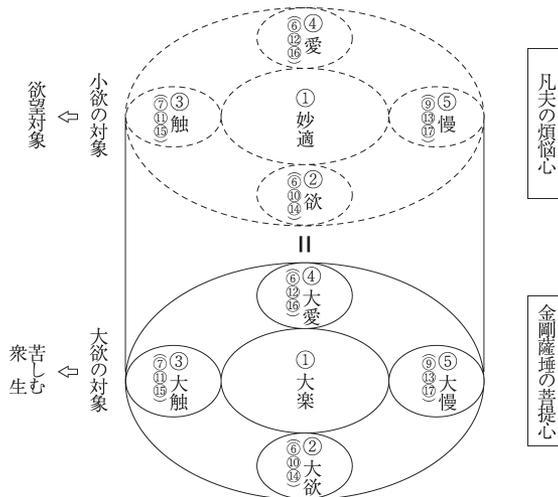


図1 初段における凡夫の煩惱心の実相

密教の菩薩・金剛薩埵の菩提心の徳性でもある①大楽・②大欲・③大触・④大愛・⑤大慢といった密教菩薩の本来あるべき五つの徳性とその働きであったということに帰着する。この構造が、煩惱即菩提の第一次的な意味となるのである。

2 第十二段の四種蔵性とその根拠たる第十六段の法身の遍満渉入

それでは、第十二段所説の四種蔵性に関して見てみたい。まず第十二段では、先に初段で見た、われわれの②から⑤までの四煩惱が、一切有情の「②如来蔵・③金剛蔵・④妙法蔵・⑤羯磨蔵」という四種の蔵性として表現されている。

時に、薄伽梵如来は、復た一切の有情を加持する般若理趣を説きたまう。謂はゆる、

②一切の有情は**如来蔵** (tathāgatagarbha) なり。普賢菩薩の一切の我なるを以ての故に。

③一切の有情は**金剛蔵** (vajragarbha) なり。金剛蔵の灌頂を以ての故に。

④一切の有情は**妙法蔵** (dharmagarbha) なり。能く一切の語言を転ずるが故に。

⑤一切の有情は**羯磨蔵** (karmagarbha) なり。能く所作を作す性と相応するが故に。⁽⁷⁾

これらの四種蔵性は、それぞれ法身大日如来の不動性・福德性・清浄性・活動性を、われわれ凡夫が本来的に内蔵していることを表している。この教説は、大乘仏教の如来蔵思想より密教的に展開したものだが、この第十二段では、大乘の如来蔵説よりさらに具体的に展開させ、一切衆生が

法身の四種徳性を蔵していると主張しているのである。この四種蔵性こそ、初段から述べてきた四煩惱に対応するわけである。こうした第十二段の立場から、われわれの煩惱を改めて眺めると、煩惱の本質は、究極的には法身大日如来の四種の徳性であったという結果になる。これが、『理趣経』の主張したい第二次的な煩惱即菩提の意味になろうかと考える。

それではなぜ、一切衆生が法身大日如来の四種徳性を蔵することになったかといえば、その根拠として示されるのが、次の第十六段の内容になる。

時に、薄伽梵無量無辺究竟如来は、此の教を加持して、究竟し円満せしめんと欲するが為の故に、復た平等金剛を出生する般若理趣を説きたまう。謂はゆる、

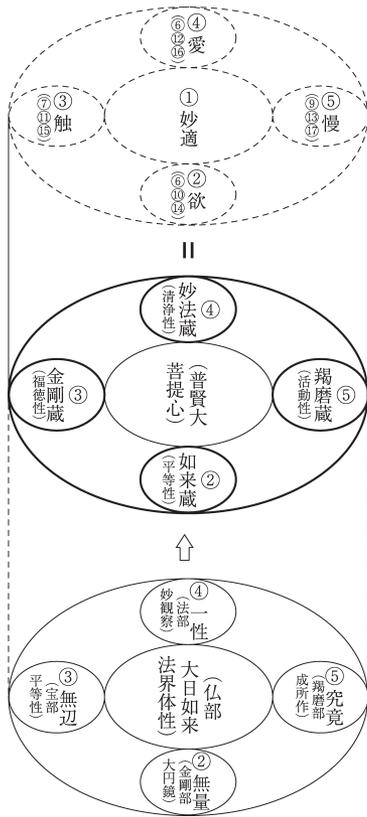
②般若波羅蜜多是**無量** (anantatā) なるが故に、一切如来も無量なり。

③般若波羅蜜多是**無辺** (aparyantatā) なるが故に、一切如来も無辺なり。

④一切法は**一性** (=anekatā) なるが故に、般若波羅蜜多も一性なり。

⑤一切法は**究竟** (=apariniṣṭhatā) なるが故に、般若波羅蜜多も究竟なり。⁽⁸⁾

経文には「般若波羅蜜多」と表現されてはいるものの、実質上、この語は法身大日如来の総体的な智慧を意味している。それゆえ、引用の文意には、法身の無量無辺なる遍満が意図されているとみることができる。この法身(①)が四徳(②～⑤)をともなって、われわれ一切衆生の中に遍満し渉入しているからこそ、先ほどの第十二段で見た四種蔵性を一切衆生が具なえることができたというわけである。この法身の遍満渉入に関するキーワードが、上記の経文では「②無量・③無辺・④一性・⑤究竟」という四つの言葉で表現される。これらは、伝統用語に換言すると、金剛部(大円鏡智)・宝部(平等性智)・法部(妙観察智)・羯磨部(成所作智)と



初段に示された
仮に汚れた現実の煩惱

第十二段における一切の有情の
本来的に有する四種蔵性

第十六段における法身大日如来
の遍滿渉入による四部の徳性

図2 第十二段と第十六段における煩惱即菩提・
凡即是仏の理論的根拠

たのであった。これらの趣旨を踏まえて、初段から引き続き煩惱即菩提の構造を捉えると、左のような図2になる。

いう金剛界の徳性をともなって遍滿渉入している意味を表しているのである。

このような法身の遍滿渉入をもって、究極的にわれわれの煩惱は、大日如来の仏部を含めた五部の徳性であったというのが、この煩惱即菩提の真意だったと考える。つまり、煩惱こそ、法身大日如来の智慧と功德とその働きだったというわけである。この考えのもとに、真言宗の伝統の中で、凡夫も本来は仏であるとみなす「凡即是仏」といった主張が生まれ

3 第十三段所説の七母女天による菩薩行の実践

引き続き『理趣経』では、先の第十二段の教説において、大日如来が四種蔵性による凡即是仏の理りを示してくれたことを受けて、第十三段に移ると、悪業の限りを尽くしていた七母女天が、自分たちも大日如来の徳性を具なえていると、その真実に愕然と目覚め、いままで行っていた悪業としての鉤召・摂入・能殺・能成から、菩薩の利他行としての勧誘・導入・能教・能成という、伝統的な解釈では四摂法（布施・愛語・利行・同事）に対応されるが、その四種の利他行を行わずよう転換した様子が示されている。ちょうどこれは、鬼子母神が、かつて子供を誘惑（鉤召）して死地に引きずり込み（摂入）、殺害して（能殺）悪行の数々を行い欲望を満たしていた（能成）のが、釈尊の教説に従って、慈しみ深い女神に改心して子供を守った説話と同じ展開内容になっている。

爾の時に、七母女天は仏足を頂礼して、②鉤召（dgug pa）し、③摂入（gzun ba）し、④能殺（gzig pa）し、⑤能成（sgrub pa）する三摩耶の真実の心を献ず。⁽⁹⁾

この悪業から菩薩としての利他行へ転換する様子は、第十三段において七母女天をもって象徴的に示されているものの、実は『理趣経』読誦者であるわれわれ凡夫も当てはまることがメッセージされている。要言すれば、われわれ凡夫も、事態は七母女天と同じく煩惱とそれによって引き起こされる悪業の限りを尽くしているが、第十二段という凡即是仏の理りに目覚めて、その煩惱・業を菩薩としての大望と利他行に転換せよ、とメッセージされているわけである。

4 第十七段・百字偈所説の五秘密菩薩の三摩地

上述した旨が密教菩薩に対して直接教示されるのが、第十七段の内容となる。ここに引用する偈文は、伝統的に「百字の偈」と呼ばれる部分である。全部で百字から成り立っているので、百字の偈と呼ばれるのだが、内容的には、①偈から⑤偈までの五つの偈文で構成されている。

①菩薩の勝慧ある者は、乃し生死を尽すに至るまで、恆に衆生の利を作し、而も涅槃に趣かず。(金剛薩埵による大楽の境地⁽¹⁰⁾)

②般若と及び方便との、智度をもって悉く加持して、諸法及び諸有、一切を皆清浄ならしむ。(慾金剛女菩薩による大欲の境地)

③慾等をもって世間を調し、浄除することを得しむるが故に、有頂より悪趣に及ぶまで、調伏して諸有を尽くす。(触金剛女菩薩による大触の境地)

④蓮体の本染にして、垢の為に染せられざるが如く、諸慾の性も又然なり。不染にして群生を利す。(愛金剛女菩薩による大愛の境地)

⑤大慾清浄なることを得、大安楽にして富饒なり。三界に自在を得て、能く堅固の利を作す。(慢金剛女菩薩による大慢の境地⁽¹¹⁾)

すでに気づかれたかも知れないが、これらの五つの偈文は、初段で述べてきた①から⑤までの妙適・欲・触・愛・慢の五煩惱に対応した菩薩の境地を説いている。これらの五煩惱は、先ほど、第十二段と第十六段において、すでに確認してきたように、本来、法身大日如来の五部の徳性でもあったので、この煩惱の本質に立ち帰って、現実世界で、欲望対象を求めるような小さな煩惱としてではなく、苦しむ衆生を救済対象にする大いなる願望をもって、菩薩として生きる価値を全うすべきであるとメッセージしているわけである。つまり、われわれの煩惱の本質が、法身大日如来の四

種の徳性であったというわけであるから、煩惱は捨て去るべきものではなく、かえって、その本質部分を活かして、積極的に活動することに意味があるというメッセージになるわけである。この点を図像的に表現したのが、以下に掲載した図3の五秘密曼荼羅の図像になる。

先の百字の偈における②偈に示される欲という煩惱は、「慾金剛女菩薩」に擬人化され、一切衆生を救済しようとする「大欲」へと展開すべきこと

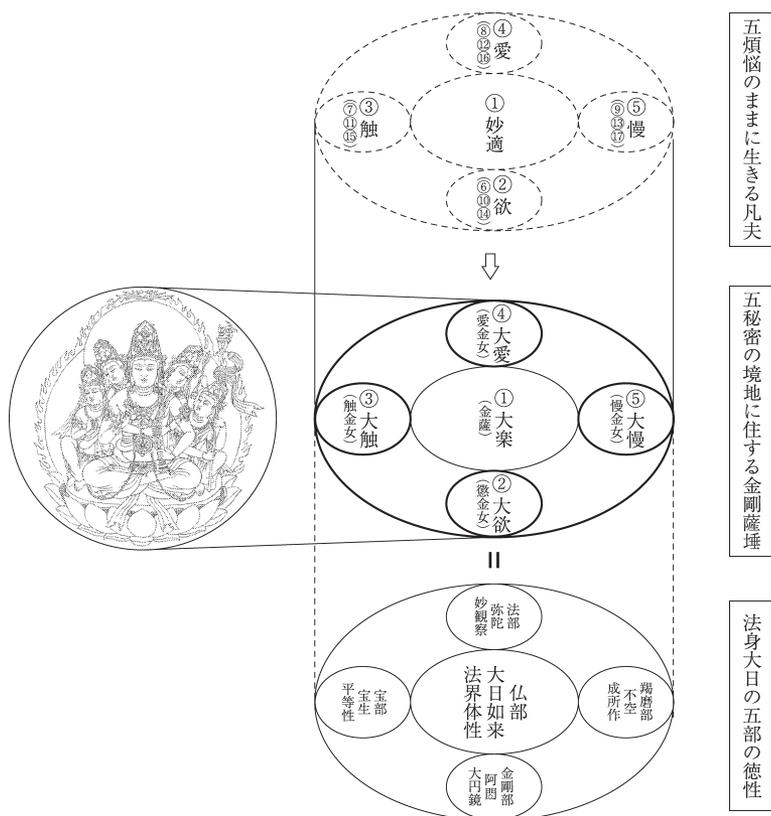


図3 百字偈所説の五秘密なる密教菩薩の利他行への転換

を象徴している。

③偈に示される触という煩惱は、「触金剛女菩薩」に擬人化され、生死輪廻の苦海に溺れる者を抱きかかえて救おうとする「大触」へと展開すべきことを象徴している。

④偈に示される愛という煩惱は、「愛金剛女菩薩」に擬人化され、まだ悟りの世界にいたらない者を慈愛の縄で縛り、悟りを得るまで決して見捨てないとする「大愛」へと展開すべきことを象徴している。

⑤偈に示される慢という煩惱は、「慢金剛女菩薩」に擬人化され、自分こそ自在に衆生を救済できる存在であると自尊する「大慢」へと展開すべきことを象徴している。もし、われわれ凡夫が、①偈に示される「大楽」という煩惱本来の価値に立ち帰って、菩提心を体現する金剛薩埵と自覚することができたなら、世俗の不浄なる欲・触・愛・慢という四煩惱はその価値を発揮して（まさに毒が薬に代わるがごとく）、それらはそのまま金剛薩埵の四種の徳性になるわけである。そして、四種の徳性を具なえる金剛薩埵になった者、つまり五秘密菩薩の境地に入ることができた者は、生の限りを尽くして、その働きを発現しながら、現実世界を浄化すべしとメッセージするのが、この百字偈の趣旨と考える。

結びにかえて

以上、『理趣経』という密教経典が主張する各章のメッセージから、今回のテーマである「仏教の生死観」に対する提言をまとめてみたい。

そもそも、われわれの煩惱は、『理趣経』第十二段と第十六段の教説から知られたように、本質的な領域では、法身大日如来の遍満渉入という働きかけのお陰で、法身大日如来の五部・五智という存在であったというの

が前提になっていた。これが、煩惱即菩提の第一義的なメッセージであったように思える。しかしながら、輪廻転生を繰り返すうちに、われわれが本来もっていた大日如来の徳性が、欲望対象を求める小さな欲望の煩惱になりはててしまったと解釈することができる⁽¹²⁾。そのような事態から脱却するために、初段では、現実のわれわれの煩惱は、本当は菩薩の菩提心を本質とするものであると総論的に述べられたように思える。第三段から第十段にいたるまでは逐次、煩惱の本質である菩提心に目覚め、大日如来の徳性を取り戻すための理論と実践方法が説かれていたのである。そして、第十三段で、七母女天が煩惱にもとづく悪業をそのまま菩薩の利他行に転換したように、われわれにも、煩惱の対象を苦しむ衆生に向けて、菩薩としてスタートせよと諭すのが第十七段における百字の偈であったように思う。

このように『理趣経』の大事なメッセージを整理してみると、結局のところ、①から⑤の妙適・欲・触・愛・慢という五煩惱は、何か対象を求めてやまない、動物としての「生命活動」とも換言できる心の働きを指していたように思える。仏教用語でこれを表現すれば「渴愛」という言葉が当てはまるように思うのだが、ともかく『理趣経』は、その生命活動を、ヒトという動物として発動させるのではなく、菩薩として、極論すれば仏として、同じ生命活動を価値あるものにせよ、と言っているように受け止められる。

『理趣経』の経題に『大楽金剛不空眞実三摩耶経』とあることを見ると、われわれの煩惱の本質が、すでに経題に「金剛」「不空」「眞実」というキーワードで表現されていたように思える。われわれの煩惱は、本当は「金剛」が意味するダイヤモンドのように堅固で光り輝き、「不空」という言葉が表現するように揺るぎないものであって、たとえ輪廻生死にさまよう凡夫の状態であったとしても、本来的に大日如来の五部・五智の存在とし

て変質することなく、清浄な存在であったというのであろう。第十七段では、その煩惱の本質である「真実」の実態一大日如来の徳性を、発菩提心によってわれわれに目覚めさせよと主張していたように思える。

最後に、この『理趣経』のメッセージを、現代に生きる私たちのさまざまな問題を解決してくれるヒントに応用してみると、次のようなことが言えるのではないだろうか。それは、私たちが問題を引き起こす自分自身の業煩惱を、独りよがりの欲望を満たすために働かせるのではなく、根源的に仏菩薩と同じ生命活動であったなら、そして限られた一生であったなら、なおさら、それを無駄にすることなく仏菩薩として価値あるものへと昇華して、積極的に互いが生きれば、よりよい人生が実現できるのではないか、という提言にまとめることができよう。

註

- (1) 『理趣経』の注釈書には以下の二本がある。
 - ・不空訳『大楽金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』二卷（大正 No. 1003, 略称『理趣釈』, 本稿による『理趣経』解釈には、本注釈書を多用した）
 - ・不空訳『般若波羅蜜多理趣経大楽不空三昧真実金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述』一卷（大正 No. 1004, 略称『義述』）
- (2) 『理趣百五十頌』に対する注釈書は、Jñānamitra 作『聖般若波羅蜜多理趣百五十註釈』（東北目録 No. 2647）とされるが、同注釈書は『理趣百五十頌』の別本に対するものであるとみる説もある。
- (3) 『吉祥最勝本初大乘儀軌王』には、アーナンダガルバによる二本の注釈書がある。
 - ・Ānandagarbha 作『吉祥最上本初註釈』（東北目録 No. 2511）
 - ・Ānandagarbha 作『吉祥最上本初広釈』（東北目録 No. 2512）
- (4) 『金剛場莊嚴タントラ』の注釈書には、Praśāntamitra 作『金剛場莊嚴大タントラ難語釈』（東北目録 No. 2515）がある。
- (5) 以下の三摩地と菩薩位は『理趣釈』の注釈にもとづく。『理趣釈』上巻（大正 vol. 19, 608b27-609a16）参照。

- (6) 『理趣経』初段（大正 vol. 8, 784a29-b12）
- (7) 『理趣経』第十二段（大正 vol. 8, 785c10-14）
- (8) 『理趣経』第十六段（大正 vol. 8, 785c26-786a2）
- (9) 『理趣経』第十三段（大正 vol. 8, 785c18-19）
- (10) 以下の五菩薩の境地は『理趣釈』の注釈にもとづく。『理趣釈』下巻（大正 vol. 19, 617a7-26）参照。
- (11) 『理趣経』第十七段（大正 vol. 8, 786a18-27）
- (12) 『理趣釈』の「何以故一切法自性清浄故般若波羅蜜多清浄とは、一切法は本来清浄なりと雖も、客塵煩惱と習氣有る故に、身心は覆蔽され六趣を輪廻するなり（大正 vol. 19, 608b27-609a23）」という解釈を参考にすると、われわれが本来もっていた大日如来の徳性が、輪廻にあるうちに欲望対象を求め小さな欲望の煩惱になりはててしまったと解釈することができるのではないだろうか。

主な参考文献

- ・ 梅尾祥雲 『理趣経の研究』 高野山大学出版部, 1930。
- ・ 那須政隆 『理趣経達意』 分政堂, 1964。
- ・ 福田亮成 『理趣経の研究—その成立と展開』 国書刊行会, 1987。
- ・ 宮坂宥勝・福田亮成 『理趣経』（仏典講座16）大蔵出版, 1990。
- ・ 松長有慶校註 『理趣経』（新国訳大蔵経『金剛頂経・理趣経他』密教部4，大蔵出版, 2004, pp. 103-132）
- ・ 小峰彌彦・高橋尚夫監修 『図解・別尊曼荼羅』 大法輪閣, 2001。

